平成３０年度　第４回大和市文化芸術振興審議会　会議要旨

１．日　　時　平成３１年２月１５日（金）午前１０時００分～１２時００分
２．場　　所　大和市文化創造拠点シリウス　２階　会議室
３．出席状況　委　員１０名（深澤会長、鎌田委員、小林委員、鈴木委員、中島委員、橋本委員
　　服部委員、伏見委員、吉川委員、米屋委員）
　　事務局５名（文化振興課長、文化振興担当４名）
４．傍 聴 人　なし
５．議　　題
　１ 開会
　２ 大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）への意見公募手続きの結果について（報告）
　３ 大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）について（議題）
　４ その他
　５ 閉会
６．会議資料
　○大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）への異見公募手続きの結果について
　○大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）

【会議要旨】
　１　開会

　２　大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）への意見公募手続きの結果について（報告）
　○市から「大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）への意見公募手続きの結果について」を説明
　○質疑応答
　会　長：意見の中にあった美術館の建設について、市としてそのような計画はないのか。
　事務局：文化芸術の振興にあたっては、ハード面とソフト面の両立が必要不可欠と考える。市としてはこれまでにイコーザ、シリウス、ポラリスといった文化施設の整備を進めてきた。
　事務局：少なくとも第３期計画においては、ソフト面の充実に注力していくことが重要と考えているが、長期的なビジョンの中で、美術館の建設ということも検討事項になる可能性は否定しない。
　会　長：承知した。今後、そのような話が出てくるのであれば、検討していただきたい。

　３　大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）について
　○市から「大和市文化芸術振興基本計画[第３期]（案）」について説明
　○質疑応答
　委　員：今回の第３期計画は誇れる内容であると思っている。この計画をもとに、市や市民、各文化芸術団体などが市の文化芸術の振興に一生懸命取り組んでいただきたいという旨の意見でまとめるのが良い。
　委　員：内容もよくまとまっていて見やすくなった。意見公募手続きにも挙がっていたが、モニタリング項目について、文化芸術振興の進捗状況を測る指標はこのほかにもあるという

旨が書かれているが、そのことがきちんと伝わるよう記載に工夫が必要である。例えば施策目標４について、イラストレーションデザインコンペが項目に設定されているが、ほかのジャンルはどうなのかと思われる方もいるだろう。

委　員：このほかにも、市内の文化施設の数や文化芸術活動している人の割合など、基礎的な文化の状況を表す数値を集約し、把握できるよう経年的な調査ができる体制を整えることも記載されていると良い。

事務局：ご指摘のとおり、疑問が生じる可能性はあるので、記載の工夫を検討したい。また、文化芸術活動の状況については、計画期間中に中間調査を実施する予定なので、そのことを明記する。

委　員：「文化芸術振興の担い手と役割」について、施策目標２の方策２－１「歴史的資源の保存、継承、活用の推進」で、教育委員会が空欄になっている。文化財行政は教育委員会ではないのか。

事務局：文化財行政については、これまで教育委員会の補助執行機関として市長部局の文化振興課市史・文化財担当が担ってきている。また、法改正により、文化財行政を教育委員会から市長部局に正式に移管する手続きも進めていることから、市の役割としている。しかし、文化財を学ぶ機会の充実などは、学校教育との連携が不可欠であることから、教育委員会にも協力をいただく場面は出てくる。

委　員：施策目標３の方策３－２「子どもの文化芸術活動をサポートする体制の整備」、施策目標４の方策４－２「若者の創造活動への支援」について、民間事業者・民間文化施設が空欄になっているが、ここは丸がついても良いのではないか。行政だけが担うというよりも、民間の力を活用して次の世代につなげていく姿勢が必要である。

事務局：民間事業者のうち、やまと芸術文化ホールは指定管理者制度を活用し、具体的な事業においても連携している実績がある。しかし、そのほかについては、市と民間事業者が連携している実績が少ないことから、今回の表記のようにしている。ご指摘の点は市としても課題であると捉えているので、表記を検討させていただく。

委　員：よくできている。ただ、「第２期の取り組みと評価」がよく作り込まれているので、どこからが第３期計画の内容かが分かりづらい。評価は大事だが、もっと簡易的な記載でよいのではないか。

事務局：前回の会議でも指摘があったが、一般の市民にこれを全部読んでいただくのはなかなか難しいものと認識している。この本編は市の考え方を明確に示すとともに、今後施策を展開させていくための拠り所として活用していく。

事務局：この本編とは別に、第３期計画を広く周知するため、内容を特化させた「概要版」を作成する予定である。ご指摘いただいた第３期計画の周知という役割を、この「概要版」に持たせていきたいと考えている。

委　員：表題を工夫すれば先ほどの指摘が解消されるのではないか。

会　長：事務局で検討してほしい。

委　員：「健康都市」という文言が急に出てきて、文化芸術の振興が総合計画のどの位置づけにあるのかが曖昧である。文化芸術の振興が健康とどうつながっていくのか、明記する必要がある。また、今年が市制施行６０周年ということなので、ひとつの区切りとして、次の７０周年に向けた思いをもっと出しても良いのではないか。

事務局：総合計画には「人の健康」、「まちの健康」、「社会の健康」の３つの領域があり、「健康都市」は、その３つの領域をそれぞれ良好な状態にすることを目指していくという考え方である。そのうち、文化芸術の振興は「社会の健康」の領域に含まれている。総合計

画と第３期計画とのつながりについて、説明を詳細にする。

事務局：また、市制施行６０周年の記載については、ほかの計画との関連もあるので、庁内で検討させていただく。

委　員：緻密に作られている。「人と人とのつながりの希薄化」は、現代社会が抱える大きな問題点である。その課題解決のための具体的な取り組みとして、１月に市が主催した森山京氏の企画展示が大きなヒントになると感じた。

委　員：企画を通じて森山京氏の人物像が浮かび上がり、そのような方が市内にいたということが広く周知できたと思う。「人と人とのつながり」というと直接顔を向き合わせるものと思ってしまいがちだが、このような企画によって人と人とがつながることも実感した。

委　員：森山京氏の人柄を知るために用意、展示された膨大な資料は、行政だからこそ収集できるものでもあり、今回の企画は行政が担う文化芸術振興の役割の一つであると言える。

事務局：森山京氏の情報はインターネット等で簡単に探すことができる。しかし、その人柄などをより深く知るためには、展示をさせていただいたような森山京氏と直接関わった方の言葉や氏の所縁の品を見ていただくことで、より理解が深まるものと考えている。

事務局：森山京氏のほかにも、過去の文化芸術顕彰受賞者で、市内で活動されている方も多い。その方がどういう人柄でどのような考えを持っているのかなど、画面上だけでは決して伝わらない真に迫ったコミュニケーションの在り方を、今後文化芸術の分野で示すことが出来れば良い。

事務局：文化芸術顕彰については、表彰して終わりではなく、受賞者が市にどのような貢献をしていただいているのか、広く市民に知らせていく必要がある。今後、このような方の存在を周知し、大和市の文化を広めていくため、市民、文化芸術団体、民間事業者など様々な担い手と協力しながら、行政が計画に基づいて予算化し、着実に事業を実施していく。

委　員：大和市はシリウス、ポラリスが新しく建設されたほか、桜丘学習センターの改修など、文化芸術活動の環境整備が進められている。また、各学校区にはコミュニティセンターもあり、身近なところで文化芸術活動ができるようになっている。狭い市域に、これだけの文化施設を整備しているまちはなかなかない。

委　員：環境を整え、計画によって高い志を示し、それに基づいて全ての市民が団結することで魂が吹き込まれる。今後の市の文化芸術の振興に期待している。

委　員：一方で、文化芸術にはそれなりの資金が必要であることを市民に理解してもらうことも重要である。資金をかけてでも文化振興を図ることで、あらゆる場面でプラスの効果が表れてくる。そういう思いを先日実施した「やまと学芸トロッコ事業」を通して感じることができた。

事務局：大和市が交通利便性の高いまちであることは大きな強みである。そのような利便性と文化芸術をどのようにつなげていくか、あらゆる分野で連携を図っていかなければならないと考えており、そのことは今回の計画にも盛り込まれている。また、重点方策を設定することで、各方策を実行力のあるものにし、市の文化芸術の振興を着実に推進したい。

委　員：大和市は若い世代が多く、幅広い年代が居住している。もっと「世代間交流」の視点があっても良いのではないか。

会　長：多世代が交流するための仕掛けづくりが必要だろう。

事務局：ご指摘の通りであるが、そこが難しいところでもある。いわゆる「おひとり様」と呼ばれる方が増えたことで、交流しないで生きたいという考え方も尊重していかなければならないと捉えている。

事務局：考え方が多様化する現代にあって、行政職員はあらゆることをイメージしながら動き、

事業を展開していかなければならない。しかし、世代間交流は重要な要素であることから、文化芸術の振興によってどのような効果がもたらされるのか、その都度検討しながら実行していきたい。

事務局：また、大和市は外国人市民も多く住んでいるまちでもある。世代間だけでなく、多文化共生の視点を持ちながら、丁寧に進めていきたい。そのためには、いわゆる「縦割り」にならないよう、それぞれの分野で各関係部署との協力および情報共有を図っていきたい。

委　員：若い世代は活字を読まないという話をよく耳にする。広く市民に向けてということであれば、当然そういう方々にも見て欲しいと思う。ただ、この世代からすると、面倒だから読まないというよりは、難しくて読まないという面も出てくるので、工夫が必要だろう

委　員：この計画は活字に苦手意識のない方には良いが、ＩＣＴを活用し、活字を苦手とする方々にもアピールできるシステムが必要である。大和市では、若い人たちがまだ増えているということが大きなチャンスでもあるので、このような世代とつながる手段について、知恵を出していきたい。

事務局：先ほども説明した通り、市が施策を展開していくために必要な拠りどころとしての「本編」と、計画の内容を簡潔かつ分かりやすい形で広く市民に知ってもらう「概要版」で、それぞれに役割を持たせる必要があると考えている。今後、「概要版」をどのようなものにするか考えていきたい。

委　員：住みやすいまちとして、多方面から大和市に人が集まっている。先日実施した「やまと子ども伝統文化塾」の発表の場で、ヤマトンが「ヤマトン音頭」を踊って、多くの人と人のつながり場をつくることができた。イベントは「横のつながり」ができたと好評だった。これからも多くの人が大和市に住んで良かったと思ってもらえるように、人と人のつながりをつくる機会を提供することを期待する。

事務局：若い世代のうち、大和市に移住してきた方に「なぜ大和市を選んだか」を聞くと、その多くが交通の利便性が良いからという回答であった。例えばその中に、「文化芸術が盛んで楽しそう」や「子どもたちへの文化芸術事業が充実しているから」といった回答が出てくるようになると、市の文化芸術の振興を進める上で、良い循環になると考えている。市の事業を若い世代へ届けるツールとして、ＳＮＳなどの活用もしっかり考えていきたい。

委　員：以前に比べて、大和市は住環境がかなり整備されていると実感している。あとは市民、文化芸術団体自身が文化芸術を通して、大和市の発展をどのようにしていくのかを考えていく必要がある。そして、これからはその使命を持って行動していかなければいけないと思っている。

会　長：行政主導ではなく、市民がもっと主体的に動くということは重要である。

委　員：例えば、シリウスができたことによって大和駅の乗降客が増えた、若い人が増えたといった情報を鉄道会社が出してくれれば、文化芸術を活用した大和市の盛り上がり具合も伝わるのではないか。

事務局：文化芸術の振興は、行政、文化芸術団体、民間事業者などがそれぞれの得意分野を生かしながら進めていかなければいけないと考えている。それを計画の役割分担に明記している。民間事業者の役割については、先ほどご指摘があった通り、もう一度見直さなければならないと考えている。

委　員：施策目標３の方策３－１「文化芸術の本物の輝きに触れる機会の充実」について、「本

物」という表現に問題はないか。「本物」に対して「偽物」があるという認識がされ、疑義が生じる可能性もある。

会　長：その点については以前も議論があった。「本物」という表現は、芸術の分野ではよく使われる表現であり、第２期計画に記載されている。

委　員：極端な言い方ではあるが、例えば人間国宝による舞台を見れば、見る人の「本物」の感覚がだいぶ変わるだろう。やまと芸術文化ホールで、そのような質の高い文化芸術を見られることに期待している。

委　員：かつて文化庁の施策でも「本物」という言葉が使われて物議を醸したことがある。「本物」というとプロや人間国宝という確立された地位をイメージしがちである。しかし、大切なことは表現者が本気で取り組んでいるかというところであり、もし「本物」の可否を問われたら、それが答えになるだろう。

委　員：地位や立場に関わらず、提供者が本気で取り組んでいる舞台や作品は、見る人に大きな感動を呼ぶことがある。提供者の本気度という意味での「本物」という理解でよいのではないか。

委　員：日本の文化芸術の良いところは、一流の芸術家とアマチュアが一緒に活動できる、活動している取り組みがあることだと思っている。日本のコンサートや展覧会などでもそのような事例がよく見られるが、海外ではあまり見られない

委　員：「本物」とは、必ずしもプロによるものということではなく、プロがアマチュアである市民を引っ張ってくれる環境があれば、市民もそれを「本物」と認めてくれるのではないか。また、地域の伝統文化なども同様に市民が認めるものが「本物」だという理解ができるのではないか。何が「本物」かということは、明確に線を引くのがとても難しい。

事務局：市が実施している事業で、市内の小学生を美術館へ連れて行き、展示されている絵画を鑑賞する美術鑑賞事業を実施している。予算だけを見ればかなり高額な事業であり、なぜこんなに費用がかかるのかというご意見もいただくことがある。しかし、一度でも「本物」を見るという体験が、子どもたちにとってお金には代えられないことであると実感している。様々な意見があることは承知しているが、この「本物」という文言を敢えて使っていくという市の思いも含まれている。

会　長：施策目標が６つ並べられているが、並び方の法則が見えない。施策目標の並び順で前にあるものが、優先順位の高い項目のように見えてしまう。施策目標の対象者や分野をもとに並べ替えた方が良い。

事務局：並び順については第２期計画をそのまま継承している。遡ると第１期計画では施策目標が５つしかなく、第２期計画から１つ追加され、現在の順番となっている。ご意見を踏まえ、検討していく。

会　長：目次のほか、各箇所に日本語と英語で記載されている。日本語以外を記載するのであれば、大和市に住む外国人市民を考慮して、他の言語の記載もあるべきではないか。

事務局：必要となる言語を管轄部署に確認をしたところ、日本語、英語、スペイン語３か国あれば概ね市内の外国人市民をカバーすることができるとのことであった。したがって、「概要版」は、英語版、スペイン語版の作成を検討している。また、本編の多言語表記については、見やすさも考慮して対応を検討させていただく。

会　長：「取り組みの方針」について、「エンパワーメント」・「プロモーション」・「オリジナリティ」というカタカナ言葉の説明が不足しているので、分かるように補足してほしい。また、各施策目標の実現に向けた駆動力となるこの３つの言葉と、後につづく施策目標がどのように関連するのかがわかりづらい。可視化して表記できるか検討いただきたい。

事務局：「計画の体系図」には、「取り組みの方針」がどの位置づけにあるのかがすぐ分かるが、ご指摘のとおり、後の文章だけでは分かりにくいので、施策目標との関連性を踏まえ記載方法を工夫する。

会　長：今後、事務局には本日の意見を取りまとめていただくこととする。

４ その他

○市から次回の開催日程について説明。第５回は３月１３日（水）１４時～を予定。

５　閉会